

『陰謀』

手順はいつも通りだった。幸運の神の僧侶、ドウルホワイトが幸運の呪文を全員に投げる。それを受けてイリネアが正確な射撃を開始する。魔法で強化された弓矢は頑強な赤き竜の鱗を貫く。しかし致命傷ではない。

竜が咆哮する。全ての生き物を恐怖で凝らせる、この世で最強の生物の雄叫びだ。

しかし天使の力を持つポルメリアには恐怖を克服する力がある。仲間も彼女の側にいれば、竜の雄叫びを耐え凌ぐ事ができた。

魔法使いであるリュイシスが氷の嵐を召喚する。赤き竜は炎の眷属。冷気には極度に弱い。

それでも竜の致命傷にはならない。頑強な体力で冷気の攻撃をも無視してパーティに突撃してきた。

「夢もなく恐れもなく、ただひたすらに剣を持って悪を撃つ」

小声でポルメリアがいつもの言葉を口にする。それが鼻につくのか、トゥルスは顔をしかめた。

「やめろよ、それ。勘に障るから」

だがポルメリアは逆に微笑んだ。

「ただのお呪いですよ。私が剣を振る為の。貴方にはありませんか？トゥルス」

「ねえよ。ただ、頭の中が真っ白になるまで、こいつをぶち込むだけだ」

彼は不機嫌なまま巨人用の巨大な大剣を叩いてみせた。

竜が迫る。他の仲間は散開する。トゥルスも脇に避けた。正面から赤き竜と対決するのはポルメリアのみ。

重い衝撃と同時に両者は容赦なく一撃を振り合う。重装の鎧と堅固な鱗。互いの装甲にそれが激突し火花を散らす。

巨体の竜に対しポルメリアは小柄な少女だ。しかし一步も引かずに打ち合いを始める。装甲は互角だった。

だが手数と一撃の重さは竜が勝る。傷を負っても端から回復していくポルメリアだったが、このまま打ち合いを続けられればジリ貧になるのは目に見えた。

そこへ竜の最初の突撃から逃れたトゥルスが強襲する。

巨人族の扱う、人間にとっては分厚い鉄板でしかないような剣が竜の鱗を貫き、深々と肉をえぐる。

竜は怒りの咆哮をあげ、炎の息を吐き出した。しかし、その線上にはトゥルスとポルメリアしかない。

トゥルスは身軽にそれを避け、ポルメリアは対炎の結果を用意して凌ぐ。

ドウルホワイトが回復の呪文をポルメリアに飛ばす。

更にイリネアが致命的な傷を負わせるべく弓矢を放つ。

今まで身をひそめて模様眺めしていたクレドネエが、やおら物陰から飛び出て竜の急所を痛撃する。

リュイシスが竜の魔法障壁を突破し、更に冷気の呪文を投げる。

ポルメリアとトゥルスがそれぞれ重い一撃を竜に加えた。それが最後だった。

「デカくて凶暴で性悪の赤い竜か・・・どおトウルス。奴だと思っ？」

クレドネエとリュイシスは竜のねぐらを漁っている。

その財宝を手に入れる為だ。ドウルワイトは一身で竜の攻撃を支えたポルメリアの手当をしている。自然に治癒するとはいえ、魔物が徘徊する荒野の真ん中でのんびりとそれを待つ事は許されない。

イリネアは自分同様、北の遊牧民であるルトロウ出身のトウルスに尋ねた。彼だけが三年前、北の大地でパリエー伯爵領を一夜で滅ぼした元凶、赤き巨龍を目撃しているからだ。

その為に彼の髪は一夜にして白くなってしまった。

赤き巨龍はトウルスとイリネアの共通の仇だった。二人ともそれによって家族はおろか一族全てを失い、帰る故郷を失った。イリネアにいたっては左目まで潰されている。憎んでも余りある巨大な敵を倒すため、彼らは竜を滅ぼす旅をしている。

だがトウルスは顔を横に振った。

「こんなちやちな奴じゃない。あんたにだつて解る筈だ。田舎で二つ三つの村を締め上げる程度の竜が、奴である訳がない」
国一つ滅ぼした竜と同じである筈がない。愚問だとトウルスは冷たく突き放した。

「まあ、わかっちゃいたけど念の為ね。しっかし、見つからないものね。
あんたの話だと、とてつもなくべらぼうにデカイ竜だつていうわね。

ところがそんな奴がいるとか、暴れているとかいう噂すら聞いた事がない。

私らの小遣い稼ぎになつちゃうような小物ばかりが耳に入ってくる・・・こりやどうしたもんですかね、ドウル？」

イリネアはこの中で一番その手の知識を持っているドウルワイトに尋ねた。小人系の童顔僧侶は困った顔で首を傾げた。

「考えられるのは、隠れているって事じゃないかな。人とか蛇とか何か他の動物に変身しているんじゃないかと思う。
でも何でそんな事しているか、って聞かないですよ。僕も思いつきで喋っているんだからさ」

「そんなこと、あるのだろうか？」

ポルメリアが呟く。

「竜は誇り高き一族です。自分の姿を他の種族と同じ物に変えるなんて何かの悪戯か屈辱でしかない。
ましてや一国を一夜で滅ぼすような竜なら、向かうところ敵なしですよ。わざわざ隠れる意味がない」

「・・・だから、思いつきだつて言っているでしょうが。

まあ、三年前の戦いの痛手が直らず自分のねぐらで大人しくしているっていう線もあるかもしれないけど・・・」

しかしドウルワイトのその意見はトウルスによって却下された。

「ありえないな」

「なんで？」

「あの時、あいつは笑ってた。余裕の笑みを浮かべていたんだ。人間なんてゴミか何かだつて顔をしていやがった」

一族を滅ぼした熱風に襲われた時、トウルスは偶然にも助かった。しかしその彼が見たものは、パリエー伯の都城を背景に、中空

で戦う巨龍と幾人かの人影だった。その時の様子は今でも昨日の事のように思い出せる。

恐怖に震えた少年の眼前で、その巨龍は必死に戦う人々をおもちゃのように扱い、鬪り殺していたのだ。

その気になれば巨龍は限定的な力を使うだけで人々を圧倒しただろう。

明らかにあれは力を振るう事を喜び、大地を焼き払い人々を殺す事を楽しんでいた。

あれが三年も雌伏しなければならぬ傷を負ったなど信じられなかった。

「どっちみち、噂を拾いながら一つ一つ当たっていくしかないよ。神様にお伺いたしても、だんまりなんでしょ？」

イリネアはジロリとドウルワイトを睨む。ドウルワイトはバツが悪そうに苦笑いするしかない。

神はその使徒である僧侶や神官の呼びかけに応じて、簡単な疑問にすら答えてくれるものだ。

だが赤き巨龍に関して、ドウルワイトの幸運を司る神は何も答えない。知らないのか、興味がないのか。

神自身の目的とは合致しないからか、それは解らない。

そういえばポルメリアの善なる軍神も答えない。善なる神々は他の場所での悪との戦いに忙しいという事なのだろうか。

いや、それ以前にポルメリアの神は答えてくれた試しがない。天使の眷属として能力だけ与えられて、明確な神の目的は示されない。

ポルメリアは命を奪う罪悪感に神によってなんの正当性も得られず、ただ人々の為になると信じる事で剣を振るっている。

今、この行為は善なる軍神の御心にならぬ事なのだろうか？

そんな疑念がふと過ぎる時がある。

だが慌てて首を振った。悪き竜を滅ぼす旅をしているのだから、御心から大きく離れている事はない。そう信じる他ない。

竜のねぐらからクレドネエの喜び勇んだ声が響く。かなりのお宝を手に入れたようだ。

「まあ、考え込んでしまわないわ。お宝を街で処分しながら、次の情報を探しましょう」

イリネアは微笑みながらさういふとクレドネエたちの方へ歩き出した。

こここの彼女が、何だか落ち着いている。どうしてだろうか？ポルメリアには良く解らなかつた。

「・・・ぬるいな」

突然トウルスがそんな事をつぶやいた。そしてお宝に沸く者たちを尻目に一人離れていく。

たった一人で死に物狂いで竜を滅ぼしてきた彼にとつて、

今のような生活は生ぬるい湯につかっているようなものなのかも知れない。

彼の体は巨大な巨人用の剣を振るう為だけに存在しているような、そんな鍛え方をしている。

その剣で竜を滅ぼす事だけが彼の人生なのだろう。

ポルメリアは、そんなひたむきな人生を歩む彼が、少しでも羨ましかった。

神に召命され力を与えられながら、何の目的も与えられぬまま足掻いている自分に比べれば、

よほどすっきりした生き方ではないか。

だがドウルワイトは不満そうに鼻息を噴いた。

「素直じゃないねえ」

「えっ？」

「人は一人で生きるよりも他人と助け合う方がよほど生き易いのにさ。まあ、彼なりに戸惑っているのかもね」

「そうなんですか？」

「まあ僕は見かけよりも年をとっていますから、人生経験から言わせていただきますと、あの年頃の少年は意地っ張りなんですよ」

ドウルワイトが幼い顔で知ったような口をきく。そういうものなのかとポルメリアは関心するだけだ。

それを証明するかのようにつウルスが怒鳴る。

「聞こえてんだよ、ばーか。そんなわけあるか」

ドウルワイトは否定するところが怪しい、といわんばかりの顔をする。ポルメリアは苦笑するばかりだ。

だが旅に出てからこっち、こんなに気持ちが悪いられているのは初めてかもしれない。

一人で旅をしていた頃はいつも何かに追い詰められているような気分だった。皆と一緒にあった頃は警戒心が優った。そして今は和んでいる自分がある。

一人ではないというのは、こういう事なのかも知れない。

お宝に対する歓声を遠くに聞きながら、ポルメリアは殺戮の後でありながら、ゆつたりと空を見上げた。高い空に雲雀の声が響いていた。

メルクス公爵領は『天使王国』が名実共に機能した時代より続く大国だ。

七大公に準ずる格式を持ち、首府メルクスは十万人の人口を抱える大都市である。

公爵家の血筋は四代前に途絶えたが、入り婿の資格で競争相手を蹴落し、

公爵位を手にしたメラオニス家は三代続けて有能な当主に恵まれ一方の旗頭として対外的にも認められている。

だが旗頭であり覇権国であるからには、他の覇権国との衝突は免れない。

メルクス公爵領の場合角突き合わせるのには南の新興国フロレンシア侯爵領だった。

金融業やその他の産業で勃興したフロレンシアは一応侯爵領という格式を持っているが、

実際のところ商人たちの合議制でありたっている国だ。公爵が専制的に振る舞うメルクスとは肌が合わない。

それだけでなく領地境にある小さな伯爵領を巡って小競り合いが絶えず、本格的な戦は間近との噂が広がっていた。

ところがメルクス公ジャーン・メラニオスは決戦を渋っていた。大国といい富強を誇ったのは先代までの話。

遊興好き建築好きのジャーン公は多額の借金を背負う身だ。

フロレンシアの業者に借りているなら借金の踏み倒しという事になるが、

角突き合せている連中から借りられるものと他国の金融業者から借り入れしているので、そうもいかない。

軍を召集するには金が必要で、もはや徴収はギリギリ一杯引き上げているので更なる増税も無理となれば、

やはり借金する他ないのだが、もはや近隣諸国でジャーン公に金を貸すような業者はいない。

そうこうするうちにフロレンシアは莫大な資金力にモノを言わせて傭兵部隊の大軍を集めているという噂が舞い込んでくる。

金の都合ができなくて出兵できなかつたとなればメルクス公爵の面子に関わる。

下手をすれば覇権国としての体面さえ失われ諸国の造反を招き、弱小国へ転落する可能性さえある。

進退窮まったジャーノ公だが、その彼に救いの手を差し伸べるものがいた。お抱え芸人の一人で何故か『ワーム』と呼ばれる赤毛の少年だった。

「閣下、ご心配には及びません。わたくしの友人で腕の良い召喚術師がおります。

つきましては死刑囚を一人ちょうだいさせていただきませんか。それだけでフロレンシアの軍勢を撤退させてご覧にいきましょう」

この言葉にジャーノ公つきの神官や宮廷魔術師はこぞって反対した。召喚術師に生贄を与えるといっているようなものだ。例え死刑囚であろうと人の命。それを捧げて呼び出されるモノがどんなものか、術者であるならば容易に想像できる。

しかし、何とかフロレンシアの大軍を退けたいジャーノ公にとって彼らの反対は、三流術者の世迷言でしかなかった。彼らの中で誰一人、フロレンシア撃退の妙案を出す事ができた者はいなかったのだから。

ジャーノ公はすぐさま死刑囚を一人、少年に与えた。

結果は観面だ。集結し領域境の川を越えて進軍を開始したフロレンシア軍の中央に、突如爆炎を操る魔神が、それも数体出現した。軍勢が組織立った抵抗をする間もなく、魔神たちは自身を中心に爆炎の呪文を使う。いくつもの火柱とともに傭兵達が火炎に焼かれ吹き飛ばされていく。

メルクスの領地を略奪する事を目的に参加した兵士たちは、これで霧散した。

軍勢を用意する事ができないジャーノ公を攻めるのだから、手当たり次第取り放題を期待した連中も多かったのだ。

しかし、軍勢の中核となる部隊は手だれの冒険者出身だ。混乱する味方を鎮め、魔神たちより離れるよう指示する。魔神相手にいたずらに数を投入しても無駄だ。精鋭部隊で仕留めなければならない。

だが戦いそのものは呆気なかった。冒険者出身の彼らが予想だにしなかった高位魔神が呼び出されていたのだ。

地獄の諸君主たちにしか従わぬといわれる強力な魔神相手に、物質界での冒険しか経験した事のない者がかなうはずがなかった。いや、彼らを倒すにはそれ専用の武器を用意しなければならなかった。

魔神たちは短い時間しか出現しなかった。だがフロレンシア軍はたった数体の魔神の前に消滅してしまったも同然だ。

雑兵は霧散し、指揮官たる精鋭部隊は魔神を前に破れ去った。

指揮する者がいない軍勢など烏合の衆でしかなく、しかも魔神に対する恐怖で浮き足立っている。

ジャーノ公の衛兵隊だけで蹴散らす事もできたのだ。

ジャーノ公は大変満足した。僅か一戦でフロレンシアの大軍を退ける事ができたのだから当たり前だ。

しかも出費は死刑囚一人のみ。自分の遊興には金を惜しまないが本質的にはケチなジャーノ公にとって、これ以上満足がいく結果はなかった。

「魔神というものは便利なものじゃのお」

彼らの本性を知らないジャーノ公はただ単純にその威力に感心した。

便利などどころか実は大変厄介な代物であると忠告する神官や魔術師たちは遠ざけられた。

国の危機に役立たなかったという理由で、だ。

代わりに『ワーム』とその知人の召喚術師が側近の座についた。

彼らは報酬といえば自分たちの質素な衣食住を保証してくれればいいというので、ケチなジャーノ公はますます彼らを信頼する。

しかし、報酬を要求されないというのも落ち着かないものらしい。ジャーノ公は赤毛の少年に尋ねた。

「本当にそれだけでよいのかね」

「いえ、閣下。実を申せば望みは他にありません。わたくしは常々『天使王国』が再統一され、世の中が平和になればよいと考えておりました。今このように英明なる閣下のお側近くに仕える幸運に浴しましたが、

閣下が『天使王国』を再統一される王となれば喜びは更に増すであろうに・・・そのような事を考えておりました」少年はしおらしく健気にそう言う。ジャーノ公も満更ではなかった。

「ほお。余が『天使王国』の王に・・・」

言われてその気になれば算段は思いつく。あの魔神たちを戦の度に呼び出せばいいのだ。しかし神官たちの反対を思い出す。国を守るのに何の役にも立たなかったが、地獄の諸君主に仕える魔神を呼び出す事が、どれほど善神に仕えるもの、あるいは信仰するものに拒否反応を起こさせるのか容易に想像できそうだった。

「様々な障害がありそうじゃの」

「左様でございます。人々が知らぬ間に勝負を決する他、閣下が『天使王国』の王となられる機会はございますまい。それには多数の魔神を呼び出し、有力諸侯国の宮廷をそれぞれ強襲させるしかありません。より多くの死刑囚と大掛かりな召喚陣が必要となります」

「金がかかりそうじゃの」

「はい、作業をいたしまする召喚術師とその配下の者たちの衣食住、これだけ保証していただければ・・・」

「それだけでよいのか？」

「ご尊敬申し上げる閣下の為に、彼らも骨身を惜し まないでございます」

「うむ。解った。全ては余が『天使王国』の王となる為じゃ。よろしく頼むぞ」

それがつい先日的事だった。

「さすがは『ワーム』。見事なお手並みですな」

召喚術師という触れ込みで赤毛の少年『ワーム』に同道しているジャーノ公よりもよっぽど押し出しのいい男が言う。だが少年は大して面白くなさそうだった。

「余りにも安直な手だったから、実は使いたくなかったんだー。それに疲れるし。

ああいう単純な手合いを話術で騙くらかすなんて芸がないし、後々の事までこつちが尻拭いをしなきゃならない。

それなりに有力でワルな奴をこつちの世界の代理人にしておけば、僕は楽ができてよかったんだけどなー」

「しかしまあ、諸君主の厳命なのでありましょっ？」

「こつちの陽動策が悠長すぎるってね。

とつとつ天使どもの戦線の柔らかいところを突けて怒鳴られちゃってさー、主戦線で何か動きがあったかな？」

「それは存じませんが、お味方の戦線に乱れが出ているそうですね」

「あー、膠着状態に我慢できなくなっている奴がいるんだ。まあ地獄の住人は自分勝手に俺様第一主義者ばかりだからな。諸君主方に見れば、何らかの打開策を下々の連中に見せてやらなくちゃならないところにきたってことか。」

んで、メルクス公爵領全域を魔法陣に収めるのに、どれぐらいの時間がかかるのさ」

ここで男は眉をひそめた。

「この広大な公爵領全域を、ですか？それをやるには時間がありませんよ。」

ジャーノ公を誤魔化し、諸外国を欺き、地獄の諸君主方の要望に答えるなんて、無茶ですな」

「やっぱり？うーむ、『穴』がデカくなれば閉じるのも難しいから、

状況が不利になっても『穴』の保持は簡単だと思っただけど、まあ無理か。仕方ない都城メルクスだけで我慢しておくよ」

「・・・それでも無茶な要望ですな。都城に仕掛けられた善神の呪いを無効化しつつ、都市一つを改めて魔法陣に編成しなおすというのは・・・」

「でもやれ。十万の魂を使用した『穴』なら、地獄の軍勢を通過させるにも安定する。それでこそ諸君主方も満足するってものさ」

「自由にさせていただけるなら、問題はないのですがね」

そう呟いた男の顔に、今までの紳士的な雰囲気は消え失せていた。

そこには破壊と殺戮に喜びを見いだす、まさしく地獄の魔神をこの世に召喚する事を生業とし喜びとする者の、暗い歓喜がただよっていた。

『『ワーム』、貴方の力ならば、ジャーノ公という愚かな君主を生き人形と化し、

彼の名前においてメルクス公爵領に圧政を敷いて短期間で生きのよい生贄を大量に調達できますでしょうに。

善なるものどもの目を盗み、隠れてコソコソと召喚陣など密かに組み上げなくても・・・」

「どーせ、ジャーノ公が魔神の力を借りて戦に勝ったという事は、

フロレンシア軍の生き残りの口から漏れるだろうから・・・ってか？

だが慌てて生贄を集めても数万単位は不可能だ。人の移動は簡単にはいかないし、

それを監督させるのもジャーノ公配下に任せるより仕方ない。手が足りないんだからな。

ジャーノ公の部下ども全員を操るなんて骨が折れるし、僕は苦労するのは嫌いなんだ。

無理矢理生贄を集めても管理が面倒くさいしね。

それよりもメルクス全市を生贄に捧げる方が手っ取り早くていいだろう？

圧政を敷くよりも、せいぜい善政を行ってもらえれば人はより集まる。

メルクスを攻撃しようとする他国の軍勢なら、魔神を一・二体呼び出せば処理できる事だし、

国の守りが完璧で、それ以外に魔神のまの字も見えないなら人は安心してメルクスで生活するぞ。

当座の生活が保障されれば、善神の神殿や祠の守りが骨抜きにされていていても気にすまい。

人は安心して暮らせるなら小さな問題など気にしない生き物だ」

少年の言葉は殺戮や暴力に喜びを見いだす悪の陣営にあつて意外なものだった。男は案の定、『ワーム』の言葉が不満だった。

「善政ですと？地獄の先触れと言われた貴方が、そんな言葉を口にするとは……」

「何事も効率良く物事を行う為さ。誰だって殺されると解つて集まってくる筈がない。無理に集めるよりも、自分の意思で足を運んでもらう方が手間が省けていいだろう？」

しかし、君はそういうのが嫌いかね？」

『ワーム』は無邪気に男に尋ねる。男はうっかり不満であるといいそうになり、しかし危ういところで口をつぐんだ。

目の前の『ワーム』と呼ばれる地獄の諸君主の覚えめでたき少年は、彼一人だけで上級悪魔一個中隊に匹敵すると言われている。

過去数百年に渡つて何者にも敗北した事はなく、諸君主の中には、彼と戦う事を恐れている者もいるという。

男はしがない召喚術師である。呼び出す魔神たちですら恐れ従う者に逆らえる筈もない。

「そういう訳ではありません……」

「へー、流石に用心深いねえ。」

まあ、いつかは殺戮の狂宴を味あわせてあげるから、とりあえずは我慢するんだね。部下や仲間にも言い聞かせておく事だ。大人しくしていないと、僕は皆を総入れ替えしなくちゃならなくなる。たった一度の過ちでも許されないよ。

その日がくるまで、メルクスは安全安心快適都市でなきゃならないんだからねえ」

赤毛の少年は邪気のない顔でにっこりと笑った。しかし召喚術師の男にとっては、何故かその笑顔こそがもっとも恐ろしいものを感じた。

「さて、当面は融通の利かない善神の使徒連中からいかにしてメルクスへの警戒心を逸らすか、

だよねえ。ジャーノ公には魔神は戦にのみ使うものと納得してもらい、君達の仲間は極力表に出ないようにして、

善神の間者相手には警戒は怠らずと。善政さえ確保していれば、そういった連中は随分煙に巻ける筈だ。

問題は、アレだなあ……」

ここで今まで上機嫌だった『ワーム』が初めて眉をひそめた。アレといわれても召喚術師には解らない。

「なんですか？」

『城砦落し』という面倒くさい娘がいるんだよ。

『悪』と名の付く者には決まって突っかかっていき、力付くでなぎ払い、倒してしまうという、あきれた『正義馬鹿』が

言われて召喚術師も合点が言った。

『悪』の陣営でうごめく、人の不幸を自分の喜びとするような連中にとって、

『城砦落し』ポルメリア・ランキンははた迷惑で厄介な存在だった。

召喚術師あたりの術者如きでは、迷惑とか厄介というレベルではなく、対面したら死の可能性すら見えるのだが。

「確かケルマディクを拠点にして動き回っていましたな。」

しかし噂によると童狩り専門のパーティに参加しているようで、最近はおっぱら悪童退治に精を出しているとか。

なんでもその連中は三年前に遙か北方のバリエー伯爵領を壊滅させた赤く巨大な竜を探しているそうですが……」

『ワーム』の本当の姿を知っている者は少ない。この世では彼の本当の姿を見たものはほとんど地獄の釜に投げ込まれているからだ。召喚術師として実際には見た事はない。だが薄々は感づいている。彼が一体何者なのか。

しかし召喚術師の探るような瞳などまったく注意を払っていない『ワーム』は、可愛い首をひねって考え込んでいた。

「巨大な赤い竜を探しているのか・・・ふむ。そいつは使えるかな。」

ロスペロツソ。いるかい？」

『ワーム』が指を鳴らすと空間に炎の渦巻きが生まれ、鏡のような曲面が現れる。

そこには赤い鱗に覆われた竜のようなものが映っていた。

竜のようなもの、というのには尊大な竜には似つかわしくなく、『ワーム』に向かって恭しく礼をしたからだ。

例え非力な幼い竜でも、他者にそんな態度をとる事はほとんどありえない。

「珍しいですな。『ワーム』が壊し屋の俺を呼び出すとは」

竜はにやにや笑いながら地獄語で言った。

誇り高き竜が自分たち以外の言語を喋る事は、まずない。ロスペロツソは竜の姿をした別の何かだった。

「テルマデイクより西方、そうだな、ルクスオール山脈にいたるまでのどこでもいい、根城を設けて一暴れしてくれ。君なら街を一つぐらい壊滅させられるだろう？」

なるべく竜の姿で暴れ回ってくれ」

「策士『ワーム』にただ暴れまわれと言われるのは意外ですな。暴れるだけでいいなら他にも手駒がいるでしょうに」

「不満？」

「滅相もない。破壊と殺戮こそ我が喜び。ただ人間 世界を破壊する為だけに俺を使うというのが、らしくない」

ロスペロツソは『ワーム』とは長い付き合いの半竜半悪魔だ。

『ワーム』がこの物質界へ地獄の軍団の橋頭堡をつくろうとやってきた二百年前よりも、もっと前から付き合い合っている。

かといって親友という間柄でもない。

地獄の住人に本当の意味での信頼関係などなく、結局のところ利害の一致と利用し利用される関係が全てだった。

たぶんお互いが炎を眷属とする竜属で、怠惰と称して本性を現さず、

いつも策略を巡らせて他の者をこき使おうとする『ワーム』とは違い、ロスペロツソは自分の力を誇示し、

自らの手で破壊と殺戮をもたらしのを好む。そんな性格の違いが却って相性が良く、付き合いが長くなっているのかも知れない。

そしてだからこそ、単純な破壊行動を命ずる『ワーム』に違和感を覚えたのかも知れない。

案の定『ワーム』は無邪気に笑って言葉を続けた。

「『城砦落し』ポルメリア・ランキンという少女騎士がいる。

善なる軍神の召命に応じ、天使の眷属としての力を授けられた・・・いつてみれば連中の戦闘人形だ。

彼女は正義感の固まりで随分なお節介で、圧政を敷いた支配者を呼ばれもしないのに滅ぼしにやってくる。

僕の相手がつとまるほどじゃないが、ちょっとかき出されるのは困る。今回はデリケートな仕掛けなんだ。

メルクスからは遠ざかっていて欲しい。もちろん、始末できれば上出来だ」

それを聞いてロスペロツソは鼻で笑った。

「たかが天使の力を借りた人間の小娘か。そんな奴ならただ殺せと命じればいいじゃないか」

「デリケートな策略を練っているといっただろう？ぼくこれからメルクス公爵領に『善政』を施す大仕事をしなきゃならないんだ。このあたり周辺で荒事が起こるのは好ましくないのさ」

「まったくもって解らんな。地獄の軍勢に属するものが『善政』だと？」

『ワーム』、あなた、策の弄し過ぎで頭の中がおかしくなっただんじじゃないのか？」

「・・・まったく、それが一番効率がいい方法だと散々言っても納得してくれない。

無理矢理集めてくる人間の数などが知れているんだ。

自分から足を運んでくれれば労せず大量の魂を地獄に捧げる事ができるんだよ。この理屈、君も解ってくれないの？」

『ワーム』は大仰に失望したという様子をしてみせる。しかしあまりに大袈裟すぎて道化じみふざけている。その事はロスペロツソにも解っていた。

「俺は壊し屋殺し屋なんでね。荒事だけがお好みなんだ。

しかし、まああなたの策略の邪魔になる小娘を、メルクスという都市からなるべく遠ざける為に、俺に暴れまわれ、そういう訳だな。

了解した。殺戮こそ我が喜び。それを満たせるなら否応もない」

ロスペロツソは楽しげな笑い声と一緒に炎の鏡面から消えた。召喚術師は息を潜めて黙って見ているより他ない。

彼にだって薄々は解る。『ワーム』に呼び出されたあのロスペロツソが、彼が呼び出す魔神とは比較にならない大物悪魔である事を。

そのロスペロツソがどうみても幼い赤毛の少年にしか見えない『ワーム』に敬意を表しているのだ。

改めて彼は、目の前にいる少年がとんでもない存在であると認識せざるをえなかった。

『ワーム』は上機嫌だった。そして彼が不機嫌になった時、何が起こるのか召喚術師は知りたくもなかった。

「さてさて、忙しくなるよ。君たちはメルクス市全体を魔法陣とする計画を練るように。

僕は僕でジャーノ公に対して『善政』の為の働きかけを行うとしよう。街が栄えれば人が集まる。

人が集まれば生贄は更に増えるというもの。次元を繋ぐ巨大な穴も安定化する。

よしよし。これで諸君主方には文句を言わせないぞ」

「あ・・・『ワーム』殿。それで全てが終わった暁には・・・」

召喚術師はおずおずと話し掛けた。彼は普通の人間である。

自分の欲望を満たす為に悪魔や地獄の勢力を利用しようとしているに過ぎない。

しかし人であり続ける事にありきたらなくなっているのも事実だった。人を超越した存在になること。

そうなれば彼の欲望はさらに容易に満たされるだろう。彼の願いはそれだった。

「ああ、上級悪魔への転向ね。いいんじゃない？それに相応しい力と功績をあげれば問題ない。

地獄のヒエラルヒーは実力主義だからね。がんばってね！」

うっかりすると天使のような微笑で他人事のように彼への報酬を喋っているが、

召喚術師の望みをかなえるのは目の前の『ワーム』に他ならなかった。彼は恐悦して礼を述べた。

「どっちにしても長丁場の策略になりそうだ。今度こそ、成功させないとね」

『ワーム』は目の前に広がるメルクス全市を眺めながら邪気のない顔で呟いた。

召喚術師にとって彼が何処まで本気なのか、いまいづつかめなかった。しかしその手並みをみれば解る。彼は本当に地獄の軍勢を指揮する大悪魔にも匹敵する存在なのだ。

爽やかな風が吹いた。いずれこれは血腥いものになるだろう。その時、召喚術師の野望も叶えられる筈だ。全ては、この策略の成否にかかっている。

しかしそれすらも『ワーム』にとっては遊びであるようだ。

「いっちょ働きますか！・・・勤勉は僕の辞書にはないんだけどな・・・」

本当に、何処まで本気なのか計り知れない『ワーム』だった。